

土田式について

武部良明著「日本速記方式発達史」

単画派の発展

(前略)

一方において実務に従事する中根式の速記者は、決してこんなことで満足できるはずがない、そのためにおのおの自己流の改変を平気で行うようになる。私たちはその代表として、比較的完備した土田式を取り扱ってみよう。土田利雄は中根式の速記者として衆議院に働き、ついにその成長に一段落をつけて昭和9年に「土田式速記法」と自己の名を冠した1人である。

(後略)

以下、「土田式速記法」の序及び目次を転載。(旧仮名遣いは現代表記に直した)

土田式速記法

序

本式は昭和5年より3カ年にわたって中根式速記法を研究したる著者が実地経験の結果、該式の不完全にして実用に適せざるを認め、これに大改変を加えてでき上がったものである。

日本速記発表以来50余年、その間種々なる速記方式が発表されて今日では式の種類は十数種の大ききに達しているが、その中で中根式は創案以来20年間宣伝に宣伝を重ねてきた、しかし該式があれだけの宣伝に値するものであるか否か、**実際上の経験からこれに批評**を加えてみたい。即ち中根式の宣伝主張の主なるものはおよそ下のごときものである。

第一は中根式は最も簡単だと宣伝していることである。しかし著者は実際を見てこの言を素直には受け入れられないのである。恐らくその趣旨は、中根式は他の式に比して基本文字が簡単であるということであると思う。しかし注意すべきは、基本文字が簡単なるゆえをもって全方式を簡単なりと解釈するのは余りにも素人考えである。論より証拠、何人でも中根式といかなる他式とでもを並べて速記の結果を比較してみるがよい。なるほどある部分は簡単なる箇所も確かにある。しかし一方簡単どころか、甚だ運筆不自然にして冗長に流れた箇所も甚だ多いことを発見するであろう。そして全体としてみたときに、複雑さにおいて他式とほとんど相違ないのである。簡単さの点に限ってみる限り、他式に優れた点があるとは言いがたいのである。これは何によるのであろうか、これは中根式の1~2の特長に余りにうぬぼれすぎた結果である。元来、何式にも1つや2つの特長はないことはない、日本に存在する全方式を並べてみるならば、いずれも同じようなものである。おのおの一長一短を有しているのである。しかるにその少しばかりの特長に陶醉しすぎたために、他の方面の進歩——ひい

て全方式としての進歩が止まってしまったのである。周囲のものが皆進歩しつつあるときに独り止まることは、相対的に見てむしろ退歩であり得ると思う。

第二には中根式をもって実社会に働いている速記者が多数にあるということをもって宣伝のよりどころとしているのであるが、現在の実情を見るに実際に活躍しているいわゆる中根式速記者は、ほとんどすべて中根式に多大の修正を加えているのであって、その実質を見たならば、中根式とは非常な懸隔のあることを発見するのである。この事実はそもそも何を物語るか、これは中根式が不完全な式であるという速記界一般の定評を裏書きするだけである。中根式には我々がいかほど正確に書いても誤読を生ずる箇所があるのである。その点を現に大成者中根正世氏も「どうも自分でも間違いやすい」と自ら言われているそうである。そこが理論と実際の合わぬところというのであろうか、理論ばかりででき上がった式は何にもならぬものであり、結局速記の活用利用は学にあらずして術だということをつくづく感ぜしめられるものがある。即ち理論において極度に簡単化できたところで、それを実際に活用し得るかどうかということとは問題である。書きよい、読みやすいということについて一言すれば、簡単必ずしも書きよく読みやすいとはいえないのである。簡単化しようとするために無理な字形を作成したり、同形字に数種の読み方を混用せしめたりする結果、書きにくくなったり、反読に際して非常な努力を費やさねばならないことになる。実際において中根式の読み返しに困難を感じずることは、反読にあらずして判読である。その結果として初学者も非常に読み返しを嫌う傾向が強いのである。速記において反読に労力を要し時間を要するがごとき方式は実際においてスピード時代に適さないものであることは疑いを容れないのである。

第三に、これは中根式の本質についてではないが — かかる簡単なる式であるから学習容易であるによって、文化人は日常生活に速記を利用せよと宣伝しているのであるが、これまた素人の釣り込まれる落とし穴である。これなどについては呶呶を要しないと思うのであるが、元来わずかの練習で速記を利用しようなどということは不可能である。速記の日常生活への利用ということは速記者 — 一人前の速記者にして初めて可能なことであって、初歩の者が利用などせんとすれば、結局中等学校の初年生が危なかしい英語を綴って日常生活を合理化せんとするのと同断、笑止のさたである。スピードどころの騒ぎではない、こんなことは明瞭すぎるほど明瞭なことであるが、やはりその道へ入らないと悟れないらしい。即ち一般速記利用志望者が、ちょっとやっっては速記を捨てるゆえんである。

さて本式において**改変したる主なる点**は次のようなものである。

- (1) 中根式は本来「ペン」を使用することを条件として組み立てられた式であるが、本式は著者の実際の経験に鑑み鉛筆を使用することにしたこと。
- (2) 三段法を撤廃したこと。
- (3) 基本文字の長さ及び角度を改め、濃淡の区別をなくしたこと。
- (4) 濁音符号を付加し、また一部の濁音に対しては別種の文字をつくったこと。
- (5) インツクキ法を改めたこと。

- (6) 助詞に大変更を加えたこと。
- (7) いわゆる和語の一部を縮字したこと。
- (8) 速記数字を制定したこと。
- (9) 筆を続けて書ける可能性が多くなったこと。

大体以上が主なる点であるが、これをもって著者はあえて改良とは言わぬ、なぜならばこの結果字形はかえって複雑になった箇所があるからである。簡単化即改良と信ずる人の眼には改悪と見ること疑いない、しかし著書は改良改悪の語句にかかわらぬ、この改悪の結果、著者の経験からすれば、かえって書きよく、かつ読みやすくなった。しこうしてそれが速記術の要諦であると信じたゆえに、こういう式もあるということを発表して識者の参考に供したいと思ったのである。

最後に本式発表にいたるまでに幾多の暗示を与えられし先輩諸氏に対し厚く感謝の辞を捧げる次第である。

昭和9年5月

著 者 識

目 次

- 第1章 基本文字
- 第2章 長音
- 第3章 拗音
- 第4章 インツクキ法
- 第5章 助詞
- 第6章 6分線
- 第7章 加点法
- 第8章 同列縮綴法
- 第9章 数字
- 第10章 略字及び縮綴法
 - 1. 音書訓読
 - 2. ラ行省略
 - 3. 中間小カギ
 - 4. 交差法
 - 5. 助詞変則使用法
- 第11章 略字表

以上が、「序」及び「目次」の全文である。以下、敬称略

土田利雄は、「序」で昭和5年に中根式を研究したと書いてあるが、中根式を最初に学習したのが昭和5年であり、中根速記学校の入学は昭和5年ではないと思う。池

田正一の — 東穂遺稿集 — 「われに悔いなし」(昭和59年1月29日発行)によると、
ほとんど貴衆両院の養成所出身者、佃塾という田鎖系の人々によって占められていて、中根式の先輩といえば、貴族院の赤坂薫氏、民間の東野清之氏、その他は学校関係者が数人という、誠に寂寥たるものだった。その後、先輩の岡本武之輔君、ぼくが指導した伊能甚嗣君、さらに土田利雄君と、次々に衆議院に入るようになって、田鎖系の地盤の中にようやく中根式が台頭し始めたわけだな。

と昭和40年1月25日に、昭和7年当時の中根式について竹島茂に語っている。土田は昭和7年12月の「第1回 全国中根式選手権大会」で2位に入賞している。昭和8年ごろ衆議院速記者になり、退職後、昭和12年10月現在の情報では東京日々新聞社に在職していたが、戦後は土田の消息が不明である。

また岡本武之輔、伊能甚嗣も戦後の消息が不明である。

石村善左によると、戦前の衆議院速記者の受験資格の年齢は数え年で29歳までだった。昭和7年当時、池田正一は明治38年1月生まれで満27歳だった。

「日本速記50年史」によると、岡本武之輔は明治42年3月生まれ(第64議会に臨時雇い・昭和7年12月23日招集)で満23歳だったから、岡本と土田とほぼ同じ年代と推定できる。

昭和9年6月1日に「土田式速記法」を発行して、痛烈な中根式の批判をしておきながら、**中根速記協会本部**からさたがなかったとは言いがたい。

中根速記協会機関誌「中根式速記」(昭和11年1月号)の年賀広告で「中根速記協会・中根速記学校・**中根速記者倶楽部**」の中に土田の名前が掲載されている。

中根速記協会機関誌「中根式速記」(昭和12年10月号)に「級段制度」が掲載されており、4段授与者の名簿に土田の名前がある。

[参考情報]

池田正一(明治38年1月1日～昭和57年1月30日) 熊本県出身

昭和7年4月中根速記学校入学、同期生に荒要、加藤与三郎、寺島武三郎、野田一郎がいた。昭和7年9月卒業と同時に中根速記学校内に池田を中心に荒、野田、**土田**、佐藤、斉藤、和田で「研究会」を結成した。昭和14年3月まで中根速記学校教師。

昭和14年4月から社会学専攻のため母校・日本大学へ入学。昭和21年1月から昭和53年7月末まで中根速記学校教授。中根速記協会本部長。中根式速記協会副会長。